

あとがき

日記は細野順三氏が戦時下での関東学院中学時代から、北大予科に入学して過ごした恵迪寮時代、そして北大医学部時代をカバーする、人生の多感な、疾風怒濤の時代の記録である。そしてこれは、戦中、戦後の価値観の大転換時代を当時の若者が何を考え、どのように過ごしていたのかを赤裸々に、鮮やかに描き出す日記ということで、誠に貴重な記録である。これを執筆し残してくれた細野氏、そしてこれを保管し、恵迪寮同窓会に寄贈して下さった婉子夫人に深甚の感謝を申し上げます。

細野氏の通った関東学院中学校は、三〇歳を過ぎてから一高に入学し、札幌農学校二期生の新渡戸稲造、内村鑑三から強い影響を受けた気骨の人、坂田佑（さかた たすく）が初代校長を務めたキリスト教（アメリカ・北部バプテリスト）系の学校である。坂田は「人となれ、奉仕せよ」と説き、これを校訓とした。このような中学校に通ったから、北大が将来の選抜肢の一つとして細野氏の心に浮上したのであるう。

坂田は戦時中、関東学院中学校のキリスト教色の払拭を神奈川県庁から求められたが、従わなかった。細野少年は信仰を維持しつつ、この頃の少年たちが皆そうであったように、戦争については大本営発表を頭から全て信ずる軍国少年だった。国を憂い、国のために鬼畜米英と戦って死ぬことを覚悟していた。日記には「人生二五年」という表現がある。死をもつて報国の誠を捧げようと駆り立てられている様子が見てとれる。徴兵年齢が引き下げられたことも手放しで喜んでいる。国の未来を背負うはずの若者を死に駆り立てるとは、当時の国政のなんと罪深いことか。

北大予科に合格した彼は、恵迪寮に入寮する。北大予科入学当初の二ヶ月間の日記がなんらかの理由で欠落しているので、彼の入学直後の北大の印象がわからないのが残念である。しかし、軍国少年だった彼にとっては入学式当日から相当の衝撃であったであろうことは予想に難くない。彼と同じ時に入学した弘田幸裕氏の手記に入学式の様子が書かれている。

「予科講堂で行われた入学式はあの有名な宇野親美（ちかよし）予科長の情熱を込めた学問と叡智のお話のあと、多分学生部長か配属将校の講話だったと思います。「八紘一字の精神で…」と話しが進んだとき、新入生の一人が手をあげての質問が、「八紘一字と言うのは日本が考え出した侵略思想の隠れ蓑ではないのですか」と言うものでした。小学校の時から戦時教育を受けて来た私には質問の意味すら分かりませんでした。（中略）

午後の軍事教練は好奇心おう盛な私も驚天動地の驚きを味わいました。教室での授業が終わり、三時に校庭集合とのことで寮に戻って服装を整え、ゲートルを撒いていると、先輩が「下駄でいいんだよ、ゲートルはいらないよ」と言う。おかしいな、これで教練が出来るのかなあ等と考えながら集合してみると、皆同じように下駄履きのゲートルなし。やがて長靴に軍刀の正装で現れた将校がこれを見るや、怒髪天を衝く形相で「下駄とは何か、靴が無ければ裸足になれ、ゲートルが無ければズボンの裾を縛って来い」三々五々ぞろぞろ寮の方に帰りかけると、「裏の農場に行つて藁（わら）を拾つてズボンの裾に結んで来い」という先輩の伝言が行き渡り、一刻してズボンに藁を結んで裸足になった乞食のような集団がゾロゾロと校庭に集まったときには「お前達は赤か、お前達が幹候（幹部候補生）の試験を受けても皆落第だぞ、絶対に下士官にもならせないぞ」と大音声の捨て台詞を残して教官は荒々しく帰つてしまい、その後教練はなし、と言う具合でした」。

細野氏も間違いなくこの乞食集団の一員であつたであろう。こうした洗礼を受け、北海道の大自然に酔いしれ、クラーク博士以来の伝統である自由な寮の雰囲気の中に取り込まれ、戦時の国民的呪縛から次第に解放されて人間を取り戻して行く彼の思考が日記から読み取れる。戦争のことよりも、美しい北国の自然の描写や楽しい寮生活の記述が多くなってきた。特に六月の鈴蘭の花の記述に、彼の感性の和らぎを見る。

一九四六年二月一九日の日記には、過去を回想して、「…そしてクラーク師の傳統に生くるエルムの学園にはせ集つた。そして俺はつくづくと個人の修養の重要さを痛感した。個人の人格の尊大さを自覺した。過去においてかりそめにも誤れる愛國心に共鳴した事を悔いた。大自然の北國の一隅に於いて俺は自覺したのだった。」と書いている。

終戦の玉音放送を聴く頃には、日本の敗戦をただ悲しむよりはむしろ終戦を歓迎し、軍国主義を批判し、新しい日本の出発に希望さえ持っているような使命感に満ちた日記を記し、札幌農学校開校式におけるクラーク博士の開校式辞の一節を書き写している。彼と同じ釜の飯を食ったであろう、昭和二〇年寮歌「命の旅路」の作曲者・新井忠雄氏は「当時もクラーク博士の思想は北大には脈々と受け継がれていた。これは特筆すべきことである。」、また、昭和二十二年寮歌「時潮の波の」作曲者・寺井幸夫氏は「戦争の只中にあっても、当時の予科にはまだ自由の気が溢れ、先生の中にも先輩の中にも個性ある人が多く、考え方も大変純粋であった。我々はよく本を読み、議論を戦わせ、先人のことを偲びつつ よく寮歌を歌ったものだ」と述懐している。

細野氏の日記の中にも、クラーク博士や、内村鑑三、新渡戸稲造、宮部金吾などの偉大な先輩の生き様に対する畏敬の念と、人間的に彼らに少しでも近づきたいという強い思いが記されている。これは彼に限ったことではない。学生たちの討論の場開議社でもしばしばこれらの先人は話題になったようだ。また、本科生の迫い出しコンパで先輩が語った「寮は傳統に輝く先輩諸兄の美しき夢（理想）のオアシスであった。その寮で恵まれた諸君がその先輩達の夢を追って学問する。故にこそ、偉大な人物が生まれるのである」という言葉に感激している。

特に医学部に進んだ後、「自分の人間形成は大丈夫か」と、氣にする記述が何度かある。高等学校時代の寮生活があることがせめてもの慰みであるが、それで十分だろうか、膨大な医学部の専門科目の勉強に追いまくられつつ心配しているのだ。「ひしひしと学問と人間性の問題に就いて考へる。学問のみに追はれて偏った人間になつてしまつたらと考えると、あせつて来る。必然的とは云へ悲しい気もする。予科時代の收穫が幾分でも役立って呉れる事を祈るのみなり」。予科時代、彼は寮友とよく語り、議論し、よく学び、よく寮歌を歌い、よく遊んだ。寮の会計委員もやつて苦勞もした。人格形成の道場だった。学部に進学すると、その余裕がなくなつてしまつたのだ。

一九四九年四月二二日、彼は総長の「人格学問共に優れた指導者として社会に奉仕するため勉強して欲しい」という言葉に迎えられて医学部入学を果たす。ついで、「北大のスクールカラーの一である

宣誓式に移る。総長も言った通り、北大に於いては、保証人制度は採らず、飽くまで個人の人格を尊重して、学生自身の宣誓書署名を以てそれに替っているのである。クラーク先生に連なる「紳士」としての学校側の取り扱いに対して、自主的行動をとる責任がある。彼の「自分の人格形成は大丈夫だろうか」とする謙虚な意識も含めて、これらは、札幌農学校の「リベラルな、人間をつくる教育」(元東大総長・矢内原忠雄の言葉)がこの時代まで脈々と生きていたことを示すものであろう。

勉強に忙しいとはいえ、日曜ごとに彼は教会にゆき、日曜学校で教え、子供らと遊び、奉仕をしている。また、随所に読んだ本の読後感や、映画を見た感想などが評論家気取りで書かれており面白い。これらも皆彼の人間形成の肥やしとなっているのだ。

戦後の日記には、帝銀事件や東京裁判、さらには当時の混乱した世相に対する彼の感想がリアルタイムで書かれていて興味深い。一九五二年正月の日記には「二つの世界の対立の中に今ぞ世紀の年は明け始めた。：国内治安を目的として発足した予備隊が、再軍備の具体的なものに肩代りする事は必然であらうし、再軍備に対する若き世代の考へ方が個人々々の心の量に従って、苦悩は広がってゆく。：僕は果して心ゆくまで修学出来るだろうか。流れゆくものを無視して温床の中に学生々活をエンジョイして良いのだろうか。」と、当時の警察予備隊が、今日のような軍備を備えた自衛隊に変貌することを予見し、世の流れをよそにして学生生活をエンジョイして良いものかと苦悩している。私もまた、大学で寮生活をエンジョイできる自分に、これで良いのか、社会のために何かしないといけないのではないかと相当期間悩んだ経験がある。今は学びの期間、人間力をつける期間と自らを収めた記憶が蘇る。

また、彼は自身の初恋、そして別れと、新たな恋についても、赤裸々に記録している。涙が出るような美しい描写もある。いずれの恋愛においても彼は非常に真面目に恋人に対峙し恋を喜び、また恋に苦しんでいる。恋は、寮生活とはまた別の、互いの人間性を高め合う切磋琢磨である。「俺は彼女のためにこそ、眞の高校生らしい理想に生きて、ジェントルマン精神を生かして恥しからぬ人間になりたいと希っている。もし、彼女を切離して考へたら到底こんな事は考へられぬ」。同様な記述がいくつもある。

「一九五二年一月二五日の細野氏日記の一節、恋人を想い書かれた言葉、「君あればこそ吾強し」に恵迪寮の「別離の歌」の一節「吾に友あり・吾強し」を重ねてみたが、やはり男女の情と男同士の友情は質的に違うものであろう。人が個として生きる時、本当に信頼できる異性の支えほど強いものはないのではなからうか。

一九五二年元旦の日記に、一九五二年度の構想と題して、細野氏は以下のことを書いている。

一・キリスト者としてのヒューマニティーを根本とする医学者としての学生々活の最高学年を真剣に学び、且つ、片寄らざるパーソナリティを養ふ事。

二・許婚者婉子とのリーベの最後の一年をベターハーフとして恥しからぬ人間たるべく努力すること。

細野氏は、「片寄らざるパーソナリティを養う」、「ベターハーフとして恥しからぬ人間たるべく」と、自らの人間性の涵養に重きを置いて努力することを自分に課している。ここでも相手を尊敬するが故に、それに見合った人物になりたいとする恋愛により高められた向上心、自己啓発欲が書かれている。こういう恋愛は素晴らしい。

「求めよ、さらば与えられん」、彼は立派な人格のお医者さんになったに違いありません。

この日記を読み、自らの同年代の頃を思い出すと、多分に共感できることも多く、感慨深いのが、その思考の深さ、真面目さ、文章力の素晴らしさに圧倒され、至らなかつた自分を思い、恥入り、反省させられる。これが八〇年前の北大生だと、自分のことではないが自慢したいような若者がこの日記の中に生きている。ぜひこの日記を現代の学生に読んでもらい、自らの成長の糧にしていいただきたい。

最後に、この日記は、北大恵迪寮の先輩・川原幸則氏が、手書きの、時には殴り書きや、癖字、そして難解な旧字体と旧仮名遣い、聞きなれない単語のある中、一字一句活字に起こしたものである。このような労を進んで取ってくださり、この貴重な日記を日の本に引っ張り出して読みやすくしていただいたことに感謝したい。そして佐藤市雄氏と不肖私が、川原先輩の情熱に感銘を受け、また、この日記に感動し、校正を担当させていただくという形で、この素晴

らしいプロジェクトの一端を担わせていただくという榮譽に預ったのである。併せて感謝したい。

蛇足

この「あとがき」を書くにあたって、必要に迫られ、活字版と、原本の日記を読み比べてみる機会があった。活字版で、書き手の意図するところがよく分からない表現があったのだ。日記はその日、その時、生きた人間が生る感情をノートにぶつけたものであり、その紙面は、ある意味、絵画にも似ている。その時の感情により、ある日の日記は大きな文字と小さな文字が入り乱れ、またある日にはかっちりとした引き締まった文字で、ある日には、乱れて、読み取りにくい文字で書かれている。

面白いもので、活字に起こしたものではよく分からなかったものが、原文の、読みにくい文字で書かれた文章を見るとすんなりと理解できる場合がある。紙面があたかも顔の表情のように、何かを訴えてくるのだ。その表情で状況が理解できる。また、文体も然り。急に今までとは違った文体が現れる。その時の心の状態を反映しているのだ。彼の日記で、ある日を境に、文字の感じが全く違う印象を与えるようになった。これは、心を通わせている人との文通により、相手の人の字体と似てきているのではないかと、ふと思った。感情の表現力において、生きた文字は活字に勝る。しかし、手書きのままでは決して読まなかったであろう。読まなければ元も子もない。こうしたデメリットを承知の上でも、活字化されて読む機会を与えられたこの日記の素晴らしさはひしひしと胸にせまる。

藤田正一